

KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

第31回

春日井市交響樂團 定期演奏會

2023年

7月2日(日)

春日井市民會館



春日井市交響樂團HP
(<https://kasugaiphil.org/>)



アカウント
@kasugaiphil

主催

春日井市交響樂團

後援

春日井市、春日井市教育委員会、
(公財)かすがい市民文化財団、
中日新聞社、中部大学



ごあいさつ



春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
石黒直樹

本日は、第31回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

当交響楽団は、1990年の結成以来、市民オーケストラとして親しまれております。その歩みが、本市の音楽文化の振興とともに長きにわたり続いてまいりましたことは、団員の皆様はじめ関係者のたゆまぬご努力と、市民の皆様からのあたたかいご支援の賜物であり、心より感謝を申し上げます。

ご好評をいただきました昨年に引き続き、指揮者に井村誠貴氏を、コンサートマスターに平光真弥氏をお迎えしました。演奏者の情熱が生み出す美しいハーモニーと深みある調べが、ご来場の皆様をすばらしい音楽の世界へと誘い、感動を与えてくれるものと期待しております。

さて本市は、6月1日に市制80周年を迎えました。この機会を節目として、演奏会を始め様々な事業を展開し、市民の皆様とともに新たな未来へ飛躍してまいりますので、なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、本日のこのひとときを心ゆくまでお楽しみください。



春日井市交響楽団
会長

学校法人中部大学
理事長・学長
竹内芳美

第31回春日井市交響楽団定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

当楽団は「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」として誕生し、地域の文化振興に貢献するアマチュアオーケストラとして、皆さまからの温かいご支援、ご協力のもと活動を続けております。31回目となる定期演奏会を開催できる喜びを深く噛み締めると共に心から感謝申し上げます。

今回も井村誠貴氏に指揮をお願いし、客演コンサートマスターとして平光真弥氏をお迎えいたしました。皆さまにお届けするのは、フンパーディンク作曲の傑作オペラ「ヘンゼルとグレーテル」前奏曲をはじめ、スメタナ作曲の代表的な管弦楽曲である「我が祖国」の中から、特に有名な「モルダウ」と「シャルカ」、そして馴染み深いベートーヴェン作曲の交響曲第5番「運命」です。

楽団員一同、今日のこの日にご来場いただいた皆さまに、最上の音楽をお届けするため、練習に練習を重ねてまいりました。その成果をこうして披露できることを本当に嬉しく思います。どうぞ素晴らしい音楽と共に、心豊かなひと時、そして、感動の時間をお楽しみください。

本日はお忙しい中、第31回定期演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。

今回の演奏会では、クラシック音楽の中で最も有名な曲である「運命」を取り上げました。この「運命」、有名な曲ではありますが、実はアマチュアのオーケストラで取り上げる機会はそれほど多くはなく、初めて演奏するという団員も少なくありません。ただ、さすが三大交響曲のひとつと言われるだけあって、練習を重ねれば重ねるほど曲の良さを感じることができ、その成果をご披露できればと考えています。

また、前半にお聞きいただく「モルダウ」も、その流れるようなメロディーは多くの方がご存知だと思います。一方、「ヘンゼルとグレーテル前奏曲」、「シャルカ」は、初めてお聞きになる方も多岐にわたりますが、いずれの曲も変化に富んだ聞きごたえのある曲で、きっとお楽しみいただけるものと思います。

今後とも、より幅広い音楽を良い演奏でお届けできるよう努めてまいりますので、引き続きのご支援をよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、当楽団の活動に当たり日頃からお力添えをいただいています春日井市・中部大学をはじめとした関係各位の皆様へ感謝申し上げます。

プロフィール

指揮 井村 誠貴 Masaki Imura



指揮者。1994年大阪音楽大学コントラバス科卒業。在学中よりオペラ指揮者として各地で研鑽を積む。オペラレパートリーは50演目を超え、中でも喜歌劇楽友協会におけるJ.シュトラウスⅡ「ウィーン気質」の邦人初演は注目を集めた。2001年イタリアに留学。現地ではAs.Li.Coの北イタリア・オペラ公演ツアーに同行し、副指揮者として高い評価を得た。2013年には年間オペラ公演回数が日本人第1位になる。管弦楽では、京都フィルハーモニー室内合奏団、大阪交響楽団、オペラハウス管弦楽団、京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団等を客演。さらにOsaka Shion Wind Orchestra (旧大阪市音楽団)、シエナ・ウィンド・オーケストラ等の吹奏楽団との関係も深くその分野でも注目を集めている。ミュージカルでは「レ・ミゼラブル」「マイ・フェアレディ」「ラ・カージュ・オ・フォール」等のロングラン公演を指揮。また、岩崎宏美や、南こうせつ、夏川りみとの共演や、キダ・タローとのコンサートも話題となっている。2014年には、自身の企画により「ベートーヴェン振るマラソン!」と題して、1日でベートーヴェンの全交響曲を1人で指揮。そのギネス級の活動は大きな話題となった。2011年東日本大震災を受け、毎年チャリティコンサートを開催。9回の演奏会で5,400万円を超える義援金を届けた。指揮を湯浅勇治氏をはじめ、松尾葉子、広上淳一、辻井清幸の各氏に師事。現在、オーケストラMF1指揮者。春日井市民第九演奏会音楽監督、関西音楽人のちから『集』代表。

客演コンサートマスター 平光 真弥 Shinya Hiramitsu



愛知県立芸術大学音楽学部卒業。2005年、同大学大学院音楽研究科修了。中村桃子賞受賞。ヴァイオリンを青山泰宏、大久保ナオミ、福本泰之、Ewald Danel、岡山芳子の各氏に師事。指揮を紙谷一衛氏に師事。第11回日本クラシック音楽コンクール第3位。第1回宗次ホール弦楽四重奏コンクール第1位。併せて、聴衆賞、オーナー賞も獲得。2007年、2010年及び2012年小淵沢室内楽セミナーにて最優秀カルテットとして「緑の風 音楽賞」受賞。2012年には講師特別賞も同時受賞。これまで、プラハ放送交響楽団等ソリストとして多数のオーケストラと共演。2000年からウィーン岐阜管弦楽団、2004年～2021年3月愛知室内オーケストラのコンサートマスターを務めるほか、神戸室内合奏団などの客演コンサートマスターを務める。クラシック音楽を親しみやすくより身近に感じてもらうために、サロンコンサートや学校アウトリーチ等も精力的に行い地域に根ざした音楽活動を展開。愛知県立芸術大学非常勤講師。2022年4月～中部フィルハーモニー交響楽団常任客演コンサートマスター。平成29年度愛知県芸術文化選奨新人賞受賞。

春日井市交響楽団 Kasugai City Philharmonic Orchestra

春日井市交響楽団は1990年に創設され、市民の音楽愛好家を中心に「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」としての活動を続けてきました。愛称「カポ」(KAPU)は英字名称「KASUGAICITY PHILHARMONIC ORCHESTRA」の頭文字をとったもので、イタリア語の「カポ」(capo 頭・先頭に立つ者)の思いもあります。日曜日には市内外から集まった約50名の団員が、西尾町にある「ハーモニー春日井」のホールで練習し、春日井市の音楽文化の原動力となるべく日々研鑽を積んでいます。

プログラム Program

フンパーディンク：歌劇「ヘンゼルとグレーテル」より前奏曲

Engelbert Humperdinck (1854-1921) "Hänsel und Gretel" Prelude

スメタナ：連作交響詩「我が祖国」より

Bedřich Smetana (1824-1884) Symphonic Poem "Má Vlast"

第2曲 モルダウ Vltava

第3曲 シャールカ Šárka

《休 憩》 *Intermission*

ベートーヴェン：交響曲第5番ハ短調 作品67

Ludwig van Beethoven (1770-1827) Symphony No. 5 in C moll Op. 67

第1楽章 Allegro con brio

第2楽章 Andante con moto

第3楽章 Allegro

第4楽章 Allegro - Presto

指 揮 井 村 誠 貴

演 奏 春日井市交響楽団



終演後、アンケートにぜひご協力ください。

※QRコードを読み取るとWebでご回答いただけます。

プログラムノート

《歌劇「ヘンゼルとグレーテル」より前奏曲》

歌劇「ヘンゼルとグレーテル」は、エンゲルベルト・フンパーディンク（1854-1921）によって作曲されたオペラです。彼はワーグナーの弟子であり、オペラ「パルジファル」で作曲を手伝ったことでも知られています。ワーグナーの技法を受け継いでおり、この前奏曲でもそれを見る事が出来ます。初演は1893年12月23日ヴァイマル宮廷劇場でR.シュトラウスの指揮で行われました。

物語はグリム童話のヘンゼルとグレーテルが元になっているのですが、少し原作とは異なっています。「意地悪な継母」ではなく「実の母親」だったり、魔女の演出にもよりますが、グリム童話の恐ろしい部分がなくなった代わりに宗教的な教訓が盛り込まれた、ハッピーエンドの優しいストーリーのオペラとなっています。

前奏曲は、このオペラの中で使われている素材をつなぎ合わせて作られています。

冒頭のホルン四重奏は、第2幕で森の中でヘンゼルとグレーテルが眠る前に歌う二重唱「夕べの祈り」です。ホルンの柔らかい美しい響きで眠りへと誘います。

次に登場するトランペットの主題は、第3幕で子供たちが魔法から解かれた時に奏でられる「魔法を解く主題」です。

その後、「露の精」によって目覚めるときに歌われる「朝の主題」が弦楽器、続いて魔法を解かれた子供たちが歌う「喜びの主題」をオーボエが奏でます。

その後、これまでに登場した主題が絡み合いながら進行し、「夕べの祈り」の主題が様々に展開され、続くクライマックスでは「喜びの歌」がテンポを落として演奏された後、「夕べの祈り」の主題に戻り静かに曲を閉じます。
(Tb.渡辺正樹)

《連作交響詩「我が祖国」より》

「チェコの音楽の父」と呼ばれるベドルジハ・スメタナ（1824-1884）の代表作で、全6曲からなる連作交響詩です。それぞれの曲を独立した1つの作品として捉えることもできますが、どの作品も祖国チェコへの愛が溢れているので、全6曲で1つの作品として捉えることで、また違う味わいがあります。スメタナは、もともと前半の3曲で完結させる予定だったようですが、作曲をするうちに祖国への愛がさらに高まり、全6曲になったそうです。そして、もちろんチェコの人々からもこの曲は愛され、毎年開かれる「プラハの春音楽祭」にて、「我が祖国」は全曲演奏されています。

♪第2曲「モルダウ（ヴルタヴァ）」

6曲中、もっとも有名で、人気がある曲です。日本では、音楽の教科書に鑑賞曲として載るほどです。もっとも、ドイツ語読みの「モルダウ」という名前の方が聞き覚えがあるかもしれません。

「モルダウ（ヴルタヴァ）」は、チェコに流れる川の名前です。その川の流れやそこから見える景色を、まるで実際に川下りをしているかのように見事に描いている作品です。

まず、2つの源流をフルートとクラリネットが奏でます。どちらもメロディーが外側に座っている方から始まるのは、2つの源流が中心に向かって一つになる様子を表しているのでしょう。

やがて、流れは大きくなり、その様子は弦楽器に引き継がれます。そして、あまりにも有名な「モルダウ（ヴルタヴァ）」の主題が現れます。この主題は、日本では合唱曲になるほど親しみのあるメロディーなので、一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。

今度は、「モルダウ（ヴルタヴァ）」から見える景色です。1つ目は、「森の狩猟」の様子。ホルンのファンファーレが印象的です。ホルンは、もともと狩猟で使われる「角笛」です。チェコの民族のルーツを表しているようです。「角笛」の音は、第3曲にも登場します。2つ目は、「農民の結婚式」の様子。可愛らしく着飾った農民たちが楽しそうに踊っている様子が表現されています。

日が暮れ、静かになりました。夜の「モルダウ（ヴルタヴァ）」です。「月の光」に照らされて、「水の精」が踊っているようです。静かな川の流れをフルートが演奏します。

再度、「モルダウ（ヴルタヴァ）」の主題が演奏された後、雲行きは怪しくなり、「聖ヨハネの急流」が表現されます。これは、川の流れだけではなく、チェコの歴史とも関係しているようです。ティンパニが轟き、ピッコロが甲高い警告音を鳴らします。

そんな危機も乗り越え、最後は「モルダウ（ヴルタヴァ）」の主題が長調になって現れ、明るく終わります。どんな困難があっても、それを乗り越え、未来へと向かっていきたいというスメタナのメッセージではないのでしょうか。

♪第3曲「シャールカ」

チェコの伝説、女戦士たちの復讐劇を描いた作品です。「シャールカ」とは、女戦士たちを率いる1人の勇女の名前で、プラハ北東の地名にもなっています。

ある時代、男たちと女たちは激しく争っていました。女たちは、力の強い男たちになかなかかわらず、ひどい扱いを受けることもありました。そこで、女戦士たちは、ある方法を思いつきました。

「シャールカ」たちの敵である男たち、「ツチラト」の軍隊は、木に縛りつけられ苦しんでいる「シャールカ」に出会います。泣き叫ぶ「シャールカ」の様子をクラリネットが表現しますが、そこには「演技のように」という指示があります。そうです。これこそが、「シャールカ」たちの作戦でした。

助けてもらったお礼に、「シャールカ」たちは、大宴会を開きます。酒を振る舞い、酔わせて眠らせ襲う作戦です。作戦はうまくいき、「ツチラト」たちは、見事に眠ってしまいました。そこで、「シャールカ」は角笛（ホルン）を吹き、仲間たちに合図を送ります。男たちのいびき（ファゴット）が響く中、「あなたはいい人よね。でも、もう殺すしかないの。」と「シャールカ」は言い、女たちの攻撃が始まります。

作戦としては卑怯ともいえる方法ですが、弱いものでも知恵を出せば強い者たちに勝てるというスメタナのメッセージなのではないでしょうか。
(Cla.大橋みどり)

プログラムノート

《交響曲第5番 ハ短調 作品67》

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は1807年に〈交響曲第5番〉の作曲を本格的に始めた。この曲は、1808年12月に初演されている。この頃のベートーヴェンの聴覚はかなり悪化しており、会話も思い通りに出来ない状態だった。一方で、作曲家としては経済的に安定しており、地位も確立されていた。交響曲第5番はベートーヴェンの創作意欲が最も高い時期の作品と言われている。この時期のベートーヴェンは、ヨゼフィーネと恋愛関係にあった。彼女の事を「唯一の恋人」と呼ぶほど彼の生涯で最も重要な女性である。好調な恋愛が交響曲第5番の作曲を長引かせたという噂もあるほどだ。ベートーヴェンは恋愛が上々だったからこそ、交響曲第5番のような劇的で激しい音楽を作曲する気になったのかもしれない。

日本では、交響曲第5番は〈運命〉の通称がある。ベートーヴェンの弟子にあたるアントン・シンドラーが冒頭の「ジャジャジャジャー」はどういう意味があるのかベートーヴェンに尋ね、ベートーヴェンは「運命の扉をたたく音」と答えたという。この仮説は日本では有名な話であるが、世界に目を向けると違う仮説が存在する。「ベートーヴェンの音楽家生命の終わりが近づく音」や「鳥のさえずり」と解説している人もいる。ここで記載のある「鳥」とは「キアオジ」と呼ばれる野鳥である。キアオジは、日本ではほぼ生息していない。キアオジの鳴き声を検索すると「チチチチチ、ツイー」と鳴いている。交響曲第5番の出だしよりも発語が反復的だが、簡潔に切り取れば「チチチ、ツイー」となる。自然散策を愛するベートーヴェンがこのさえずりから交響曲のテーマを思いついたのかもしれない。

第1楽章: Allegro con brio



(譜例①: 冒頭部分、総譜の一部)

この楽章は、譜例①のように8分休符から始まり、有名なメロディへと繋がっていく。そうすることで、指揮者・奏者が1つになり、力強い音楽を生み出していくことができる。太線で囲われた部分は聴きなじみのある「ジャジャジャジャー」のフレーズで、「運命の動機」と言われている。この楽章は、強弱と緩急がはっきりと出たメロディをもつ。静と動が対比されたこのメロディは、心の移り変わりを表現している。

第2楽章: Andante con moto

第1楽章のメリハリのある展開から一転した、緩やかな流れへと変化する。第一主題は弦楽器、木管楽器の穏やかな雰囲気包まれる。続く第二主題は木管楽器に現れ、金管楽器へと力強い旋律が引き継がれる。

第3楽章: Allegro

チェロとコントラバスによる、地の底から湧き出てくるような低音での「幽霊の動機」とも呼ばれる主題がでてきたあと、ホルンがいきなりff(フォルティシモ)で「運命の動機」を力強く奏でる。トリオの部分では、バルリオーズが「象が喜んで踊っているようだ」と評した主題が出てくる。主題は各楽器に引き継がれ、次の楽章に切れ目なく入る。

第4楽章: Allegro-Presto

この楽章は当時の交響曲としては珍しいピッコロ・トロンボーン・コントラファゴットが加わり、メロディをいっそう盛り上げる。冒頭、終楽章の主調であるハ長調の主和音(ド・ミ・ソ)を基にした華やかな第一主題が力強く奏でられる。ハ長調で描かれた劇的で重々しい「運命の動機」が支配する第一主題に対し、この楽章は華やかで明るい響きが印象的なハ長調でフィナーレを迎える。途中から3連符と4分音符を組み合わせた音型が現れ、これも「運命の動機」を連想させ曲に統一感を出す。(Cb.大矢 光知留)